



TITLE:

南詔國の成立

AUTHOR(S):

林, 謙一郎

CITATION:

林, 謙一郎. 南詔國の成立. 東洋史研究 1990, 49(1): 87-114

ISSUE DATE:

1990-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/154314>

RIGHT:

南詔國の成立

林 謙 一 郎

序 言

一 南詔國の反唐歸蕃

(一) 張虔陀事件と征討の失敗

(二) 南詔國の支配階層

二 唐天寶期の對雲南政策

(一) 當事者の相互關係

(二) 吐蕃政策との關連

結 語

序 言

天寶九載（七五〇）、いわゆる「張虔陀事件」を契機に、南詔國王閣羅鳳⁽¹⁾はそれまで従ってきた唐のもとを離れ、敵對勢力である吐蕃に弟事することになった。これが南詔國にとって獨立への第一歩となった。

この事件を中心とした前後數十年間、皮羅閣・閣羅鳳父子の時代が南詔國の成立期であるといふことができる。たしかに諸史料では閣羅鳳をもって南詔國の王族蒙氏の第五代とする。しかし、最初の數代に關しては史料が少ないために具體的な動向はほとんど知ることができない。勢力のおよぶ範圍からいっても當時の雲南地方の狀況の下では大理盆地南方の

一有力氏族（蒙舍詔）にすぎなかった。これが雲南地方一帯、あるいは少なくともその中央部に位置する昆明・大理の兩盆地を支配下においた獨立勢力に成長するのが、本稿の扱う八世紀後半という時期である。

南詔國成立の具體的な經過については、藤澤義美氏の綿密な考證⁽²⁾によってほぼ明らかになってきている。氏の研究には、いかにして蒙氏が雲南地方内の對立勢力を打倒し、實力を蓄えて、唐と吐蕃の抗争を巧みに利用しつつ獨立を達成したか、という視點が貫かれているといつてよい。以前の民族系統論一邊倒の南詔大理國に關する研究と比較すれば、それは大きな進歩といつてよいであらう。しかし、氏の描く南詔國の成立史とはあくまでも蒙氏の勢力擴大と霸權獲得の歴史であり、そのように視點が固定されてしまっていることが逆に南詔國の成立に對する評價を歪めることにもなりかねない。

いかに邊境の小國といえども、支配者個人の野心や軍事的才覺のみに南詔國成立の原動力をもとめることは不可能である。まして中國の中原地方やチベット高原などとはまったく環境の異なる雲南地方にはじめての統一政權として現れてくることを考えれば、南詔國の成立に對する評價には慎重にならざるをえない。また以下の章でも述べるように、南詔國は決して蒙氏の武力を楯にした獨裁政權ではない。藤澤氏によれば蒙氏に「打倒」されたはずの大理盆地の有力氏族たちが、實際には支配階層内のきわめて重要な位置にあり、國政をも左右しているとみられる。軍事的にも、經濟的な面でも南詔國を支えたのは彼らの存在であるといつても過言ではない。これらの狀況を考慮すれば、蒙氏の意志以上に、彼らに一つの政權を形成せざるをえなくするような何らかの要因がこの時期に生じたのではないかと考えることができる。統一が蒙氏によってなされたことはむしろその結果にすぎないともいいうるのである。

そして、このような狀況をもたらした背景を探るとすれば、それはやはり當時の國際關係、とくに唐―吐蕃關係の動向と雲南地方とのかかわりを中心に据えざるをえないであらう。吐蕃は八世紀初頭の贊普の死とそれにつづく内外の混亂を克服していい、徐々に勢力を盛り返してきていた。開元二年（714）年、一四（718）年および開元二六年（740）年天寶七載には三

度にわたって唐と大規模な戦闘を行い、天寶一四載には安史の亂の混亂に乗じてついに長安を占據している。⁽³⁾

むろんこれらの唐蕃交戦の主要な舞臺は中國西北地方であつた。しかし第一回の交戦に際しては唐の唐九徵・李知古が姚州方面の叛蠻を討ち、吐蕃の雲南に入る道を斷つたことが直接の原因の一つに數えられ、⁽⁴⁾ 第三回の前半は成都西北の安戎城をめぐる争われるなど、西南中國の諸民族集團もそれと無縁ではありえなかつた。南詔國の形成がこれらの唐蕃交戦とまさに同時に進行していることから、兩者に密接な關連があることが豫想できるだらう。これまでにも唐と吐蕃の争いが兩國の對雲南政策に影響を與えたことは指摘されてきたが、唐と蒙氏、吐蕃と蒙氏といった個別的な検討にとどまつており、なおそこには議論の餘地が残されている。とくに開元末から天寶年間にかけての唐の對吐蕃政策と對雲南政策の連動、それと南詔國の形成過程との關係という問題はぜひとも明らかにする必要がある。

近年、中國においては少數民族の社會・文化に關する研究や出版物の發表が相次いでいるが、雲南省においても南詔・大理國に關する研究が非常に活潑になつてきている。その中で林超民氏は南詔國による大理盆地統一までの時期に焦點をあて、その背景として農業經濟の發展、六詔によつて政治・軍事機構がもたらされたこと、そして唐の雲南政策——吐蕃に對する對抗勢力として蒙氏を利用したことを擧げる。⁽⁵⁾ その指摘にはまことに首肯すべき點が多く、氏の論考が南詔國が本格的に外部勢力からの獨立への動きを開始する八世紀後半に及んでいないのが惜しまれる。

本稿はこうした點をふまえて、天寶九載の事件を中心に、南詔國成立の歴史的意義を可能な限り明らかにしようとするものである。具體的にはまず初めに「主體」となつた南詔國の支配階層がどのような構成のものであつたかを述べ、次にそれを取り巻く當時の情勢を、唐側の對應を中心に探つてみたい。

一 南詔國の反唐歸蕃

(一) 張虔陀事件と征討の失敗

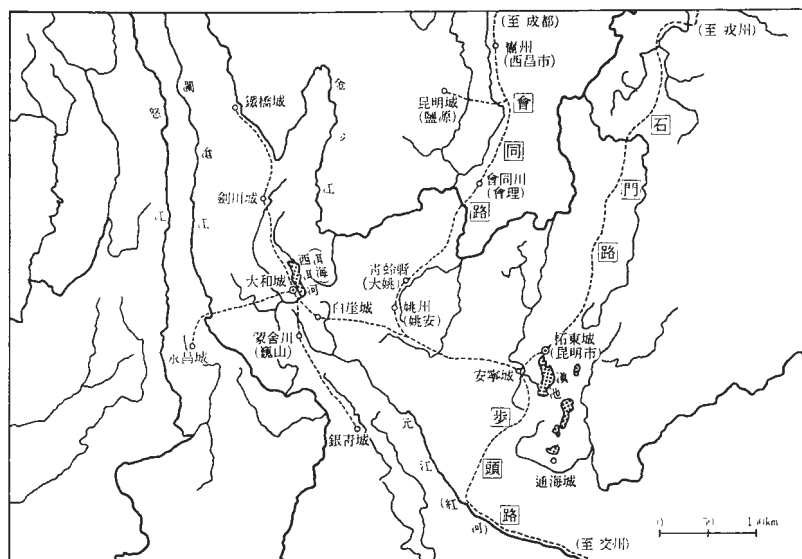
張虔陀事件について、『新唐書』卷二二上 南蠻傳上（以下『新唐書』南蠻傳上と略記）には次のように述べる。

鮮于仲通劍南節度使を領す。下忿にして方略少なし。故事、南詔嘗て妻子とともに都督に謁す。雲南を過ぐるに、太守張虔陀これを私し、求丐する所多し。閣羅鳳應ぜず。虔陀數たび之を詬斬め、陰かに其の罪を表す。是に由りて忿怨、反し、兵を發して虔陀を攻め、之を殺し、姚州及び小夷州凡そ三十二を取る。

『舊唐書』卷一四七 南蠻傳（以下『舊唐書』南蠻傳）・『資治通鑑』（以下『通鑑』）卷二一六にも同様の記述がある。要するに當時の唐の雲南における最前線基地であつた姚州の都督である張虔陀が閣羅鳳に對して非道の振舞いはたらいたため、これに腹を立てた閣羅鳳が舉兵に踏み切つた、というものである。

翌天寶一〇載四月、劍南節度使鮮于仲通が討伐の兵を發した。『通鑑』には仲通が八萬の兵を率いて戎州・嶺州から出撃したと述べられているが、『南詔德化碑』⁽⁶⁾（以下『德化碑』）によれば、これは南溪路（戎州・南寧州・昆州）から鮮于仲通、會同路（成都・嶺州・姚州）から大將軍李暉、さらに步頭路（交州・昆州）から安南都督王知進の三方から雲南に入るものであつた。閣羅鳳は謝罪し、捕虜を返還することを申し出たが、その態度はもしこれが容れられなければ吐蕃に歸附する、という強硬なものであつた。⁽⁷⁾結局これを許さずに撃つて出た鮮于仲通は大敗し、閣羅鳳は吐蕃に弟事して「贊普鍾」の稱號を與えらる。⁽⁸⁾

鮮于仲通にかわつて劍南節度使を領した楊國忠は敗戦を隱蔽し、内地から大量の兵を動員して征討の軍を起こした。一載には姚州の回復を試みたが失敗し、さらに一三載には七萬の兵を劍南留後李宓に託し、安南方面から何履光が嶺南五



(雲南地方要圖)

府の兵を率いて参加したが、また大敗に終わった。⁽⁹⁾これらの南詔國の抵抗の裏には吐蕃の軍事的援助があったことがわかる。⁽¹⁰⁾楊國忠はなおも敗戦を隠して南詔國征討に異常な熱意をみせたが、その結果は死者二〇萬にも及ぶ惨状であった。のちまもなく安史の亂が勃發し、唐朝が雲南地方のことなど顧みる餘裕を失ったことは周知のとおりである。

蒙氏はこの事件の直前まで、一貫して唐朝に協力的な態度を取ってきた。史料に傳える蒙氏と唐朝との交渉は高宗代に初代の細奴羅、武后の時代に二代の羅盛が唐に對して遣使を行ったことからはじまる。⁽¹¹⁾四代皮羅閣の時代に蒙氏は急速に勢力を擴張した。それは大まかにいって、大理盆地中南部(西洱河蠻の打倒)、同盆地北部(五詔の併合)、昆明盆地(爨氏の討滅)という順序で進められたが、これらはすべて唐側の意向に沿う形で行われた。大理盆地中央部すなわち洱海西岸の諸城の制壓、および五詔併合に際しては唐の軍事的援助を得たことが『德化碑』に記されている。これらの功を認める意味で唐朝は皮羅閣に「歸義」の名を與え、雲南王に封じた。⁽¹²⁾次に南詔國は六朝期いらい雲南東部の支配的勢力であった爨氏を滅して昆明盆地を手中

に收めた。これもやはり唐の歩頭路開發に伴う爨氏の内部抗争を唐にかわって收拾する、という形をとった。蒙氏は、いわば唐朝の雲南政策に乗じる形で勢力を擴張してきたという面がある。

ところが、この事件では一轉して蒙氏が反唐の舉に出、唐の宿敵ともいえる吐蕃に與しているのである。これに關する從來の説明は、(一)二大盆地の制壓を成し遂げた蒙氏と歩頭路經營を強力に進めようとする唐との利害對立が尖鋭化していた (二) したがって蒙氏は絶えず獨立の機會をうかがっており、唐側も強大になった蒙氏に對して警戒をいだいていた という二點を挙げ、たまたま張虔陀の非道から起こったこの事件が蒙氏の反唐への契機になったのであらうというものであった。⁽¹³⁾ 唐側の史料が蒙氏(閣羅鳳)と唐の交渉、蒙氏と吐蕃との交渉という形で三者の關係を述べていることを考えれば、これはきわめて常識的な見方であるといえるかもしれない。しかし、ここでの蒙氏の意圖というのがその後の唐—南詔國關係の展開を前提として組み上げられてきたことは事實であるし、突然の反唐にはやはり不自然な印象を受けることも否定できない。

だが、當時の南詔國、とくに支配階層の構成を見ると、この事件は單に閣羅鳳と唐朝の方針の衝突というにとどまらず、南詔國の内實を大きく反映する事件であることが明らかになるのである。

(二) 南詔國の支配階層

唐代の雲南地方に關してはもともと史料が限られているため、南詔國の支配階層の構成、とくに限られた時期のそれがある程度網羅的に示すことが一般にきわめて困難であることはいうまでもない。しかし、この時期に限っては『德化碑』の存在によってそれが可能となる。これは『蠻書』卷五に

大和城、北陽直畔城を去ること二十五里。(中略)城中に大碑有り、閣羅鳳清平官鄭蠻利の文なり。阻絶皇化の由、受制西戎の意を論ず。

とあるものに相當するとされ、贊普鍾一四年（永泰元年、七六五）までの記事を含んでいる（閼羅鳳は大曆一四年（七七九）死）。この碑の碑陰銘が當時の南詔國で高位の官職を保有していた人物の氏名を列舉したものになっており、碑文中にみえる人物を加えれば百名近い閼羅鳳代の高官在官者名を知ることができるのである。すでに藤澤氏がこの碑にもとづいて閼羅鳳代の重臣在官者表を作成しているため、⁽¹⁴⁾碑文自體の史料價値の吟味などは氏の論文にゆずり、表の主要部分のみを上げると次のとおりである。ただし碑自體の剝蝕から姓（名前の首字）の不明なものは除いた。「全體」はここに舉げた姓以外を含む合計、「實人數」は兼官を除いた實際の在職者數である。

	楊姓	段姓	趙姓	王姓	李姓	尹姓	全體
清平官	1	2	1	0	1	0	6
大軍將	7	6	5	4	5	4	46
軍將	6	1	1	1	0	0	14
その他	5	1	2	1	0	0	12
(延べ數)	19	10	9	6	6	4	78
實人數	15	8	7	6	6	4	70

官職名のうち「清平官」は宰相に當たる南詔國の官制上最高の官で、常に南詔王とともに國內の大事を圖っていたとされる。⁽¹⁵⁾「大軍將」は武官の最高位であるが、『蠻書』・『新唐書』南蠻傳などの傳える後の整備された官制では、彼らも清平官とともに南詔國の最高諮問會議とでもいうべきものに列席していたとされる。⁽¹⁶⁾

ここに舉げた六姓で全體の半數以上を占めており、彼らが當時の南詔國內における第一等の有力氏族であるということ

ができる。このうち王姓までの四者は、皮羅閣の時代に蒙氏によって打倒されたとされる西洱河蠻に屬する。西洱河蠻については『新唐書』南蠻傳下に條項が立てられているが、『通典』卷一八七の松外諸蠻條には、貞觀二二年に梁建方が遠征したときの大理盆地の狀況を

其れ西洱河、嶺州より西千五百里、其の地數十百部落有り、大は五六百戸、小は二三百戸。大君長無し。數十姓有り、楊・李・趙・董を以て名家とす。各々山川に據り相役屬せず。

と傳え、『新唐書』の記述もほぼこれに従うものになっている。また『蠻書』卷五の渠斂趙條には、「大族王・楊・李・趙四姓有り、皆白蠻なり」と記されている。渠斂趙は洱海東南の鳳儀の地に比定されており、唐軍の西洱河蠻に對する遠征の記事などからも、彼らの本據が大理盆地南部にあったことがわかる。これらの史料には段氏の名は直接表れてこないが、同書卷六の雲南城條に「故渭北節度段子英」の名がみえ、⁽¹⁷⁾南詔國滅亡後に大理國を建てる段氏が大理盆地の出身であったらしいことは『南詔野史』などからもうかがうことができる。⁽¹⁸⁾

尹氏は『蠻書』卷四にみえる青蛉蠻に屬すると思われる。⁽¹⁹⁾これはもと姚州の北の青蛉縣（大姚縣に比定される）に居たもので、嚴密に言えば西洱河蠻には含まれないが「白蠻苗裔也」とされることには變りない。なお李姓については右の史料に西洱河蠻に李姓の大族があったことが述べられているが、『德化碑』に表れてくる李氏の多くは滇池西北（今の富民縣附近）に根據地を持っていた獨錦蠻に屬するとされる。獨錦蠻は蒙氏と婚姻關係にあり、これは「烏蠻苗裔」とされている。⁽²⁰⁾

『德化碑』の碑陰銘が同時代の南詔國の高臣をほぼ網羅している、あるいは少なくとも特定の氏族に片寄ったものではないと假定すれば（この碑文が歸化漢人の鄭回の手によって書かれたということから後者の可能性は少ないと思われる）、閣羅鳳時代の南詔國の支配階層は主に洱海南方に勢力圈を持つ西洱河蠻の有力氏族から構成されることになる。問題は藤澤氏も指摘するように、⁽²¹⁾これらがいずれも民族的には白蠻種に屬するとされること、これに對して蒙氏と同系統の烏蠻種に屬するとみなされる者がきわめて少ないことである。⁽²²⁾

唐宋代の雲南地方に關する史料には烏蠻・白蠻という二大民族（分類）が頻出する。これらの民族系統に關する考察は長いあいだ南詔・大理國研究のもっとも主要なテーマであった。このうち、烏蠻に關してはチベット・ビルマ系の民族で、現在四川省南部から雲南省北部にかけて廣く分布する彝族（ロロ族）に相當する、ということがほぼ定説となっている。ところが、白蠻は現在の白族（大理盆地が分布の中心）につながると思われるものの、その民族系統についてはこれまでにさまざまな説が出されてきた。わが國では一九五〇年代に、牧野巽氏の烏蠻・白蠻ともに（廣義の）チベット・ビルマ系に屬するという見解に對し、白鳥芳郎氏が白蠻はタイ系であると主張して論争を展開した。中國でもこの問題は現在の白族の族源問題という形で取り上げられた。⁽²⁵⁾西歐人のいわゆる「南詔タイ族説」に對する反撥が強いことがこの論争の特徴であったが、現在は烏蠻・白蠻ともに雲南土着の民族であり、言語的には藏緬系の一支に屬するというのが中國學界における定説になっているようである。

烏蠻種は六朝末いらい四川南西部から南下してきたともいわれ（現在の中國學界では否定的である）、元來おもに牧畜を産業とする民族である。その一部は洱海周邊に定着して六つの政權を建て、「六詔」と總稱された。⁽²⁶⁾蒙氏の蒙舍詔は六詔のうち最南に位置することから「南詔」と稱し、これが國名の由來となっている。その他の烏蠻種としては大理盆地北方の劍川・麗江方面に分布する施蠻・順蠻や昆明盆地の東北に散居する東爨烏蠻の諸部落がある。⁽²⁷⁾また成都から姚州へいたるルート上、嶺州（四川省西昌市）以南には東蠻と呼ばれる諸集團があり、その主力は烏蠻種であった。これに對して白蠻種は古くから雲南地方中央部の低平地に定着していた農耕民族であり、晉寧石寨山遺跡などに代表される雲南古代文化は彼らが擔ったものと考えられる。唐代には大理盆地の西洱河蠻、および昆明・曲靖兩盆地を中心とする爨氏の勢力が白蠻種の代表であり、他にも洱海と滇池を結ぶ線上には、青蛉蠻・弄棟蠻など白蠻系に屬する集團があった。

烏蠻・白蠻の分布地域は雲南地方の北部と中部に比較的截然とわかれている。先住民と新來の移住民、という對照もある。また『蠻書』や『新唐書』南蠻傳が「東爨烏蠻」「西爨白蠻」という對比的な表現を用い、さらに後の時代の史料が

これを雲南地方の民族全體を大きく二つに分類するために擴大解釋して用いたため、これまでの研究では「雲南蠻族は必ずこのいずれかに屬するものである」としたり、「烏蠻と白蠻の基本的對立關係」を指定するのが普通であつた。したがって、南詔國は新來の烏蠻種に屬する蒙氏が先住の白蠻種を征服して建てた一種の異民族政權のようにいわれることが多かった。

しかし、『德化碑』碑陰銘に列擧された重臣の多くが白蠻系の西洱河蠻出身者によつて占められていることは、このような見方を許さない。烏蠻と白蠻の對立を強調する見解に明確な史料の根據があるわけではなく、民族系統論争において烏蠻白蠻の別を明確にする中から逆に生まれた見方であるといつてよい。實際には兩種ともに複數の集團がそれぞれの利害をもつて動いている。烏蠻種全體、白蠻種全體、というように一括して扱うことには、あまり意義をみいだすことができないのである。烏蠻種の蒙氏が白蠻種の西洱河蠻や爨氏を打倒したとされることは事實であるが、南詔國に最後まで抵抗したのは劍川方面に逃れた三浪詔の殘黨や烏蠻系の施蠻・順蠻などであつたし、爨氏打倒の際に南詔軍を率いたのは、『德化碑』によれば白蠻系の大軍將段忠國である。⁽³²⁾

史料には皮羅閣の時代に蒙氏と「河蠻」「洱河蠻」を逐つて洱海西岸の諸城を手に入れたことが記され、これが蒙氏の「西洱河蠻打倒」を意味するものであると見なされてきた。しかし、これをそのまま西洱河蠻＝楊氏・段氏などの有力氏族を蒙氏が制壓したことを表すものと解釋するのは若干の問題がある。この件に關するもっとも古い、またもっとも詳細な史料は『蠻書』卷四の河蠻條であるが、そこには

河蠻、本と西洱河人、今河蠻と呼ぶ。故地六詔皆な在るに當り、而して河蠻自ら洱河の城邑を固む。(中略)南詔蒙歸義の大釐城を攻拔するに及び、河蠻遂に並びに北に遷り、皆な浪詔に羈制さる。

と述べる。少なくともここにいる「河蠻」は、もと洱海西岸に居住していたもののうち、皮羅閣がここに入ったときに北へ逃れて三浪詔の配下に入ったものを指している。これは、いままで一般に使われてきた、また本稿でも使用している

「西洱河蠻」とは意味あいが異なるのであり、右に見たような大理盆地南部の有力氏族たちがここに含まれないことは明らかであろう。蒙氏が楊氏・段氏などを武力で打倒したことを具體的に示す史料が他に見あたらない以上、南詔國の洱海西岸への進出を述べるこの記事をもって「蒙氏による西洱河蠻の打倒」を表すものとみるのは困難なのではないだろうか。

また、假に武力鬭争があつたと假定するにしても、そのような成立に至る経過と實際に閣羅鳳の時代の南詔國がどのような構成のものであるか、というのとは別の問題である。これまでもつぱら國內の對立勢力として捉えられてきたものが實際には政權の中核において大きな割合を占めていたということの意味は大きい。

蒙氏と西洱河蠻が對立する勢力であるとされてきた理由は、民族系統を異にすること、南詔國成立の早期に蒙氏が西洱河蠻を破つたとされることの二點であつた。ところがこの兩者ともに實は明確な根據に缺けてゐるのである。そこで假に烏蠻と白蠻の區分・對立、といった枠をいったんはずして考えることが許されるならば、彼らがいったんは主導權をめぐって争いながらも結果的に一つの政權を構成したというのは決して不自然なこととはいえないだろう。

南詔國の成立をその中心となる支配階層が形成される過程とそれが周圍に勢力を擴張してゆく過程に分けて考えるとすれば、前者は皮羅閣の末年にはほぼ完成の域に達していたということができる。皮羅閣は天寶七載（七四八）に卒し、閣羅鳳が即位する。それはまさに南詔國が爨氏の混亂に乗じて昆明盆地を手中に收めようとしてゐるさ中であつた。段忠國率いる南詔軍が唐軍とともに爨氏の混亂を收拾した後、閣羅鳳は昆川城使楊牟利を派遣して西爨二〇萬を永昌に強制移民させている。⁽³³⁾この時期から大軍將など南詔官制の萌芽がみられるとともに、段氏・楊氏などが前面に出てくるようになる。

南詔國の官制や諸制度については『蠻書』や『新唐書』南蠻傳上に記載があり、中央官制や統治體制、また一種の徵兵制や稅制のようなものも記されているが、それらは閣羅鳳の末期か六代異牟尋の始め頃に改變整備されたものであるとい

われる。⁽³⁴⁾ いずれにせよ七五〇年前後の時期にはこれらの制度がそれほど整っていたとは考えられない。それは『德化碑』碑文中に清平官・大軍將などの官名にまじって「首領」「大酋」などが肩書として使われていることから明らかであろう。したがってこの頃の南詔國の軍勢力も國軍というような整備されたものではなく、おそらくは各有力者の根據地におけるなかば家産的な兵力に頼るものであっただろう。だからこそ、これらの有力者に大軍將・軍將位を亂發する必要があるにちがいない。そしてこれらの肩書を保有するものに楊氏・段氏・王氏が非常に多いということは、初期の南詔國の軍勢力の重要な部分がこれら白蠻系の有力氏族によって擔われていることを表すことになる。さらに、このような傾向は官制等の整備された後も「酋望」という南詔國独自の官職（あるいは稱號）を設けるかたちで溫存されていく。⁽³⁵⁾

西洱河蠻がこのような形で南詔國に取り込まれていったのに對して、爨氏はこれ以降まったく活動を傳えられず、強制移民によって勢力を根絶されてしまったらしいことも支配階層の固定化を物語るものであろう。逆に楊氏・段氏などがこれ以降昆明盆地にも勢力を扶植しつつあったことが南詔國後期の安南都護府侵攻に關する記事などから窺える。蒙氏自身も七六五年には昆明盆地に柘東城を築いて閣羅鳳の長子鳳伽異がここを治めた。⁽³⁶⁾ 南詔國後期の諸王は柘東城に居ることも多かったらしく、九代勸利盛・十代豐祐は『南詔野史』に「東京に卒す」と傳えられている。

要するに南詔國は支配階層の構成など、ある面では大理盆地南部の有力氏族の連合體とでもいふべき一面を持つのである。そこで蒙氏が王位を獲得したことについては、確かに蒙氏が軍事的に優位に立っていたことがひとつの要因であっただろう。しかし蒙氏が單に武力によって他の有力氏族を屈伏させていたとは考えられない。

それを示すものの一つは張氏白子國から蒙氏への遜位がなかば説話化されて繰り返して傳えられていることである。白子國については唐宋代の中國側史料にまったく言及がなく、『德化碑』もこれに觸れないためその存在に否定的な見解もある。しかし南詔時代末期の原作といわれる『南詔圖卷』⁽³⁷⁾にこの遜位に關する傳承が述べられていることからすれば、唐初

ごろまで大理盆地南部の白崖城を中心に何らかの地方政權が存在したことは確かであろう。白子國はその名稱や立地からしても、また遜位傳承に登場する人物名からしても白蠻種主體の政權、すなわち大理盆地南部の有力氏族の連合のようなものであらうと想像される。そこから政權の移譲を受け、西洱河蠻によって推戴されたことを蒙氏は強調しているのである。

これ以外にも、閣羅鳳の孫異牟尋が哀牢夷の始祖である永昌沙壹の子孫であることを自稱している例がある。⁽³⁸⁾ これらはいずれも、蒙氏自身が貴種であることを主張する意味合いもあることは確かである。しかしそれと同時に實際には烏蠻種出身であるにもかかわらず、哀牢夷など雲南土着の農耕民族に屬すると主張するということは、自らが白子國の後を繼ぐ、白蠻有力氏族の連合の盟主としての正統性を持つことを表明するものにほかならない。

このように白蠻種との親和性、白蠻の政權との連續性を蒙氏みずから強調しているという面を持つことは、南詔國において西洱河蠻の有力氏族の力が決して無視できないものであったことを反映しているともみてよいだろう。

ここで再び張虔陀事件に戻るなら、先に述べた蒙氏のそれ以前の動向との違和感の原因は既に明らかであろう。西洱河蠻をはじめとする大理盆地南方、および姚州周辺の諸民族は唐初より唐勢力の雲南進出に反抗し、太宗時の梁建方の遠征⁽³⁹⁾、しばしば征討を被っていた。また七世紀の末になるとこれらはみな吐蕃に歸附して唐の雲南經營の大きな障害を⁽⁴⁰⁾なし、八世紀初めの唐九徵・李知古の征討が第一回唐蕃交戦の契機となったことは既に述べたとおりである。藤澤氏は彼らが何度も唐軍の征討を被ることによって自己の勢力を損耗し、逆に唐に従順な態度をとることによって實力を溫存してきた蒙氏に打倒される結果となったと述べた。⁽⁴¹⁾ しかしむしろ、もともと反唐的傾向を持っていた西洱河蠻の有力氏族が発言力を増し、彼らの利害が國政を左右するに至ったからこそ、南詔國がこれまでの方針と逆に反唐にふみきったものと考えるほうが實情に近いのではないだろうか。

それではなぜ、ほかでもない八世紀中葉のこの時期に、急速に南詔國の支配階層が成立するに至ったのであろうか。

『南詔圖卷』によれば白子國から蒙氏への遜位は二代羅盛の時期、六七〇年代に行われたという。それにもかかわらず、先に引用した『通典』が「大君長無し」とするような大理盆地南方の諸氏族の分立的傾向は、それから半世紀以上のあいだ大きな變化をみせなかった。個別に反抗していたからこそ、唐朝も何度か征討軍を送ることによって前線基地姚州を維持することができたのであった。

皮羅閣・閣羅鳳という有能な指導者の出現がそこに大きな役割を果たしていることは否定できない。しかしそれ以上に、四川南部における唐と吐蕃との關係が以前になく急激な展開をみせていることにも注目しなければならない。次章では視點をかえて、劍南節度使を中心とする同時期の唐側の人物の相互關係を明らかにし、唐の雲南政策の意圖するところを探ることから、南詔國成立の外的要因を考えてみたい。

二 唐天寶期の對雲南政策

(一) 當事者の相互關係

南詔國を反唐歸蕃に導いた直接の原因が姚州都督張虔陀の暴虐に求められていることは前章で述べた。しかし、邊境民族の反亂の原因が現地官僚の無能さに求められるのは漢文史料では常套句である。まして、このような評價がその後に生じた南詔國の反唐歸蕃、南詔征討軍の失敗という結果ゆえに後代の史家によって與えられていることを思えば、この事件そのものを張虔陀個人の責任に歸するべきかという點から再検討する必要があるだろう。

張虔陀については、『德化碑』に彼がかつて越巂都督であったことが記されている以外、詳細は明らかではない。だが、事件當時の劍南節度使鮮于仲通についてはいくつかの興味深い事實を知ることができる。張虔陀事件について述べる際、ほとんどの史料がまず鮮于仲通が劍南節度使に就任したことから書き起こしており、それはあたかも彼が單にその後

の南詔討伐に従事しただけでなく、最初からこれに關與していたことを示唆するかのようである。

『通鑑』卷二一六の天寶九載年末條には、鮮于仲通が劍南節度使の職を得るのに楊國忠の薦があったことを述べる。⁽⁴²⁾だが、この二人の關係はこのときにはじまったわけではない。鮮于仲通は蜀の富豪であるが、『通鑑』卷二一五 天寶四載八月條には

楊釗、貴妃の從祖兄也。不學無行、宗黨の鄙しむ所と爲る。蜀に軍に従い、新都尉を得。考滿ち、家貧にして自歸する能わず、新政の富民鮮于仲通常に之に資給す。

とあつて、楊國忠が蜀で不遇の生活を送っていたときから、仲通が經濟的援助を與えていたという。⁽⁴³⁾これ以降、鮮于仲通は楊國忠の財政的後楯としての役割を果たすことになる。

楊國忠が中央政界へ進出するきっかけを作ったのも仲通であつた。『新唐書』卷二〇六 楊國忠傳には

劍南節度使章仇兼瓊、宰相李林甫と平ならず。楊氏の新たに寵有るを聞き、之と結納するを以て奥助と爲す有るを思ひ、仲通をして長安に之かしめんとす。仲通辭し、國忠を以て見えしむ。幹貌頎峻、口辯給。兼瓊喜び、表して推官と爲し、長安に春貢するを部せしむ。

と述べる。章仇兼瓊は開元二〇年代の成都西北における安戎城奪回に功のあつた人物で、それによって玄宗からも評價を得ていたが、中央政界に後楯がなく、時の權臣李林甫に追いつき落されるのを恐れて新たに寵を得た楊氏に取り入ることで保身を圖つたのであつた。兼瓊は國忠に「蜀貨百萬」を持たせて楊氏に對する運動費用としていた。⁽⁴⁴⁾この結果、章仇兼瓊は天寶五載五月に戸部尚書となるが、史料には「諸楊引之也」と明記されている。もちろん同時に國忠も楊貴妃らを通じて玄宗にとりいり、その後の中央での活動の足がかりを得るのである。このような關係があればこそ、國忠が反唐後の南詔國征討にあれほど熱意をみせた、というのも確かであろう。

また、章仇兼瓊は前章で觸れた曇氏の混亂を招いた歩頭路開發のそもその提唱者でもある。すなわち、反唐後の南詔

國討伐にとどまらず、開元末から天寶年間(46)の唐の雲南政策全體が、この淺からぬ縁にある三人の人物によって主導され、彼らの意向を反映したと思われる張虔陀・李宓らによって實行されているのである。そこで南詔國の反唐歸蕃、およびそれに續く南詔國征討の失敗を招いた唐側の要因としては、もっぱら鮮于仲通や劍南留後の李宓など直接擔當者に人を得なかつたこと、これに對する楊國忠の介入の打算的かつ惡辣粗暴であつたことが數えられてきた。(45)もちろん南詔國に完敗を喫したこともあつて南詔國關係の史料における鮮于仲通の評價はすこぶる低い。しかし『通鑑』には「頗讀書、有才智」とあつて、彼がまつたく無能な人物であるとは思われない。確かに慘憺たる結果に終つたとはいへ、そこに個人的な資質や野心の問題以上の必然性をみいだすことはできないだらうか。

(二) 吐蕃政策との關連

唐朝は高祖の頃より雲南地方に對して關心を示し、經營を進めてきた。(46)それはまず隋代の史萬歲の遠征の後を繼いで戎州から南寧州(曲靖市)に至り、曲靖・昆明盆地に州縣を設置することからはじめられた。太宗の後半になるとこれは大理盆地方面にも達した。(47)高宗代に姚州に都督府が置かれるに至つて本格的な經營がはじまるかにみえたが、まもなく吐蕃勢力の四川南部・雲南西北部への進出により、唐の雲南進出は頓挫をきたすことになる。

七世紀の雲南地方への進出は、もっぱら唐帝國の對外擴張の一環であつたといふことができる。それは反抗的な勢力には武力を用いながらもむしろ招諭を旨とするものであり、羈縻州縣の設置と維持に意が用いられている。(49)むしろ雲南地方の產物やビルマルトを通じて西方・南方からもたらされる物產は古來中國人の珍重するところであつた。その獲得が雲南への進出の動機の一つになつてゐたであらうことは、貞觀二二年の梁建方の松外蠻征討の際に嶺州都督劉伯英が「請擊之、西洱河天竺道可通也。」と述べていることからも否定できない。しかしこの時期の雲南經略に、大理盆地に達して後さらに西方、あるいは南方に通路を開拓しようという意圖はほとんどうかがわれない。何度かの征討行の目的地を見る限

り、明らかに雲南地方の住民を威服して羈縻體制のもとに組み入れることが目的とされている。資源・物産などに關しては、すでに雲南地方、とくに大理盆地に集められたものの入手がもくろまれたと考えるべきであろう。雲南地方の民族のうち大理盆地の白蠻系有力氏族がはやくから唐に對して激しく抵抗したのは、このような方針が彼らの既得權を侵害するものであったからかもしれない。しかも前線基地姚州におけるこのような富源の獲得は必ずしもうまく行っていないからしく、武后期には張柬之の姚州廢止論が出るほどであった。⁽⁵¹⁾

唐朝が再び雲南地方を重視しはじめるのは八世紀の初頭からであるが、それは前代とはまったく違った意味を持つものであった。七世紀の後半から吐蕃は西南中國にも進出しはじめた。それに對して唐朝は高宗の顯慶年間（六五六～六六〇）に成都の西北に安戎城を築いて防衛の據點としたが、これは早くも永隆元年（六八〇）には吐蕃の手に陥ちてしまつていた。⁽⁵²⁾

以下、煩を避けるため八世紀前半の四川南部と雲南地方に關する事件を列舉する。

景龍 元年（七〇七） 唐九徵、姚州・西洱河方面に遠征を行う。「斬獲三千餘人」。⁽⁵³⁾

景雲 元年（七一〇） 李知古の遠征。姚州「群蠻」を下すも、蠻酋傍名（烏蠻系か？）に殺される。⁽⁵⁴⁾

開元 元年（七二三） 姚嵩蠻が姚州に寇し、都督の李蒙がこれに死す。

三年 嵩州蠻寇邊す。右驍衛將軍李玄同舊屯兵をあわせてこれを伐つ。

四年 黎州の復置。

五年 南寧州の復置。

七年 劍南節度使の設置。⁽⁵⁵⁾

九年 姚州が復活、舊來の數倍の兵員が配備される。⁽⁵⁶⁾

一七年 嵩州都督張守素、昆明及び鹽城を抜き、昆明軍が設置される。

劍南節度使は開元七年の設置らしい、その努力をもっぱら吐蕃勢力の南下への對應に費してきた。開元十年代までは直接吐蕃の軍と矛先を交えることはなかったが、この時期の四川南部の住民の反亂にはかならず背後に吐蕃の存在があったと考えられるし、雲南地方における南寧州や姚州の復置も、吐蕃と結んで反抗を繰り返す各地の民族を押えようとするものであった。そこに前代のような雲南地方自體の物産などに對する積極的な關心を示す餘裕はみられないといつてよい。

もっぱら受け身にまわっていた劍南節度使が大々的に攻勢に出たのが、開元二十六年から始められた安戎城奪回作戰であった。『舊唐書』卷一九六上 吐蕃傳上にはこの模様を詳しく傳えている。劍南節度使王昱は城の左右に新城を築いて攻撃の據點としていたが、同年九月には吐蕃の精銳が安戎城を救い、新城をも奪われてしまった。次に二七年には華州刺史張宥が益州長史・劍南防禦使に、主客員外郎章仇兼瓊が益州司馬・防禦副使となった。章仇兼瓊は文官の張宥をさしおいて軍權を掌握し、入朝してさかんに攻取の策を述べるなど、この作戰に非常に積極的であった。また玄宗もそれに對して並々ならぬ熱意を示し、張宥に代えて兼瓊を節度使に任じ、みずから取城の計を畫するほどであった。二八年春、兼瓊は城中の吐蕃將翟都局・維州別駕董承宴らの内通を受け、ついに安戎城の奪取に成功し、監察御史許遠に鎮守させた。同年十月、吐蕃は再び安戎城を攻めたが、兼瓊は關中の驍騎の救援も得てこれを防ぐのに成功した。安戎城は平戎城と改められ、この作戰で兼瓊の威名は大いに上がったのである。

奪還成功後の數年間は新設の平戎・天寶二軍を中心とした吐蕃に對する防禦體制の整備に忙殺されたものと思われる。しかし二八年以降對吐蕃戰の主要な戰場は西北方面に移動していった。⁽⁵⁷⁾ いっぽう雲南地方においては、皮羅閣がこの頃ま

でに大理盆地南部の諸氏族に勝利を収めて彼らの結集を完了し、五詔の討平も終え、開元二十六年には歸義の名を與えられて、ひとまずは唐に對して従順な態度を示していた。ここにおいて劍南節度使の當初の課題であった吐蕃に對する防衛、雲南諸民族の反抗への對應の兩者がとりあえず解決されたのだった。

しかし、兼瓊はそれで安閑としているわけにはいかなかった。當時朝廷では李林甫が專權をふるっており、中央に後楯をもたない兼瓊は功をあげて玄宗の覚えがめでたくなればなるほど追い落しにあらう危険も大きくなっていった。楊國忠を中央に送って楊氏に取り入ったことがこれへの對策であることは前節でも述べたが、玄宗の彼に對する評價を維持するためには、任地においても何らかの成績を上げつづける必要があった。次にどういう行動に出るかが大きな問題であった。

『通鑑』天寶四載八月條には兼瓊が鮮于仲通に對して

今吾れ獨り上の厚くする所と爲り、苟し内援無くんば、必ず李林甫の危うくする所とならん。

と語ったことが記されているが、これは彼の内心のそうした焦燥を表しているようにも読み取れる。

結局、兼瓊は次に雲南地方に目を向ける。それが當時同地方の最前線であつた姚州から東に向かつて昆明盆地東部の安寧城に至り、さらに南下して紅河沿いに交州に至る歩頭路の開発であつた。

これがいつごろ着手されたかについては具體的な史料が残されていない。しかし『德化碑』から、爨氏の混亂が收拾された際には彼はすでに劍南節度使の任を離れていることがわかるから、兼瓊の在任期間の最末期、おそらくは右の鮮于仲通とのやり取りと同時期であるとしてよいであらう。

この事業が章仇兼瓊の進言により開始されたことは事實だが、前節で述べた人脈と關わりがあることも確かであらう。安寧に築城しようとした竹靈倩が爨氏に殺害されたのち、爨崇道を煽動して爨氏を内紛に導いた李宓の事蹟は『蠻書』や『德化碑』などの史料が詳しく傳えている。これに對して、兼瓊が中央へ轉出したのちに劍南節度使となつた郭虛己は李宓を處分して混亂を收拾したことが傳えられる以外、雲南地方への進出に對して積極的な姿勢を示した形跡があまりみられない。その後、天寶八年に郭虛己の後を承けて鮮于仲通が節度使に就任し、その直後に張虔陀事件が発生するのである。

藤澤氏は歩頭路の開発に關して、その背後に蜀川商人の直接交州方面を通じて南海貿易の利を求めようとする動きがあ

つたのではないかと示唆する。⁽⁵⁹⁾氏は具體的な史料の根據を擧げていないが、すでに述べたような兼瓊と鮮于仲通の關係を念頭においたものとすれば確かにうなずける面はあるだろう。いずれにせよ兼瓊が何らかの形で兵を動かす必要にかられていたものとすれば、それが腹心とたのむ仲通の利害と結び附いたとしても無理はないであろう。仲通みずからが節度使となったときにそれが張虔陀の雲南住民への誅求という形でより明確に表れ、仲通と利害を通じる——資金面で彼に頼る楊國忠がその後の南詔國征討に躍起になったのも理解できる。

だがいずれにせよ、劍南節度使の職掌にははじめから雲南地方の掌握が含まれている。⁽⁶⁰⁾したがって、とくに四川官憲の地方權力強化や經濟力充實、商人の交州貿易への希求などを動機として持ち出すまでもなく、吐蕃問題を解決した兼瓊が雲南地方に目を向けるのは當然ともいえるのである。

ここに至るまで、劍南節度使は雲南地方に對しては姚州を始めとする據點の軍事力を增強はしたものの、この方面への吐蕃の進出や、それに呼應した諸民族の動きを完全に抑えるほどの力はなかった。そのため、現地民族の力をこれに利用することに努め、いわゆる「夷を以て夷を制する」方策に出たのだった。五詔併合に際しては皮羅閣が王昱に賄賂を送り、これを默認させた、と『新唐書』南蠻傳上は記すが、これは王昱の個人的な行動というよりは唐の戰略全體に對應するものである、との林超民氏の指摘は妥當であろう。第一章でも觸れたように、南詔國が洱海西岸の諸城の制壓、五詔の打倒を實現した際には唐が援助を與えている。唐が南詔國の擡頭を許したことについては、單に安戎城という當面の大きな課題を抱えるために雲南地方の諸民族の制壓にまで力をさく餘裕がなかったというよりも、このように吐蕃に對する一貫した作戰のなかでとらえられるべきであろう。

しかし、それが外民族の力に頼る消極的な作戰であったことも確かである。安戎城を奪回して吐蕃に對する前線の整備がなされた時点で、劍南節度使はこれまでの方針を轉換し、より積極的に雲南地方に介入することに決めたのだった。具體的にそれがなぜ歩頭路の開發という形をとって表れたかについては、たしかに藤澤氏のいうような經濟的な動機づけが

あったのかもしれない。あるいはこれを機に、成都と交州の両面から強力な通路を設け、雲南地方を一舉に内地化してしまおうとの意圖があつたのかもしれない。また當初の推進者が章仇兼瓊であることを考えれば、これによって四川における對吐蕃戰の補給路を強化しようとした可能性もある。その理由を一つに限定することは困難であらう。だが、安寧築城にともなう爨氏の反抗などにみられるように、⁽⁶¹⁾そのやり方が武力を背景として現地住民をまったく無視したものだったことを考えれば、それが雲南地方を唐—劍南節度使の直接的支配下に組み入れようとする側面を持つことは確かであらう。

歩頭路はその後數回の南詔國征討においては使用された形跡があるが、それが所期の目的をみたすほどに成功したかどうかは不明である。しかしその副産物として、雲南東部の一大勢力であつた爨氏が混亂のうちに南詔國に滅ぼされるといふ事件があつた。南詔國は昆明盆地を手中に収めたが、それは同時に雲南地方の直接經營を進めようとする唐との對立の構圖が明確になることを意味した。唐側からすれば次の標的が南詔國になるのは當然であり、それは張虔陀の個人的な非行云々の問題ではない。

また、雲南地方の諸民族の側から見れば、八世紀初頭以降、舊來にない大量の兵馬が姚州などに常置されるようになったことは、彼らに少なからぬ脅威を與えたであらうことは疑いない。前章でも述べたように、この時期にのちの南詔國の支配階層となる集團が形成されはじめていたのである。藤澤氏は右に述べたような、この時期の劍南節度使が安戎城奪回に忙殺されたことによって雲南地方を顧みる暇がなくなり、その安寧を蒙氏に委ねたことを蒙氏の勢力擴張の主因と評價している。⁽⁶²⁾

しかし、いかに主力が對吐蕃戰に振り向けられていたといつても、姚州が半ば放棄された状態にあつた七世紀の後半と比べれば、雲南地方における唐の勢力はむしろ強化されているとみるべきである。南詔國がもつとも頑強に唐勢力に反抗し、攻撃の矢面となつてきた姚州群蠻——その中には當然大理盆地の有力氏族も含まれる——を中心とするものになったのは決して偶然ではないだらう。蒙氏は前代までの友好的な態度から唐にとつても利用價值のある存在であつたが、大理

盆地南部の有力氏族にとっても、かつての白子國からの繼承性を持つ蒙氏は、王としていただくのに好適であった。また、おそらくこの時期には劍南節度使や吐蕃の軍勢力を前面に出した雲南地方への進出に、各有力氏族がもはや個別には對應しきれなくなっているのであり、あらたにこれに匹敵し得る勢力を形成しようとするならば、すでに唐への強力な窓口をもつ蒙氏を正面に立てるのが有利であることはいうまでもない。

さらに大局的に見ると、吐蕃の侵入以降、唐はこの地方において以前のような羈縻州縣體制を維持することが困難になってきているということができる。これが一般にいわれる唐後半期における周邊諸民族の活潑化にまで還元できるものかどうかはわからない。しかし吐蕃という對抗勢力の出現によって、雲南の諸民族にとって唐王朝はもはや唯一絶対の中心ではなく、互いに相争う外權力の一つにすぎなくなってしまったのである。

これに對して唐の取りうる道は、羈縻州縣による間接的な支配をより直接的な支配に轉換するか、勃興してきた南詔國のような政權を認知してさらに間接的な支配、あるいは支配の放棄そのものに甘んじるかの二つであったといつてよい。そして、結局のところかの章仇兼瓊―鮮于仲通―楊國忠という人脈がめざしたのは、いちおう後者の方向で進みつつあった開元末までの政策を轉換し、前者の道をもっとも端的な形で實現することだった。張虔陀事件が安史の亂の直前に起こったというのも決して偶然ではなく、このような時代的背景を抜きにして個人的な性格や野心をもって説明することは不可能なのである。

結 語

以上二章にわたって南詔國成立期の内的、および外的な状況について検討してきた。内的状況に關しては南詔國が蒙氏の政權というよりは大理盆地南部の有力氏族の連合的な側面を持つものであること、外的状況に關しては同時期の唐の雲南地方に對する施策が劍南節度使の對吐蕃作戰、ひいては唐王朝の變質過程とも關連するものであったことを述べた。史

料的な問題、および筆者の力不足から、吐蕃側の雲南地方に對する動向に關してはほとんど扱うことができなかった。

林超民氏も指摘するように、唐代の雲南地方、とくに大理盆地地方は、經濟的には林產資源・鑛產資源だけでなく、白蠻種を中心とする農業生産が發達し、「人衆殷實、蜀川よりも多し」⁽⁶³⁾「其の衆完富、蜀と埒し」⁽⁶⁴⁾といわれるほどであつた。政治的・軍事的な面に關しては、氏はもっぱら六詔に遊牧社會を基礎とした比較的緊密な社會・軍事組織があつたことを重要視しており、白蠻系民族は大君長も強力な政治機構も持たなかつたため、洱海地區に統一政權を建立する力はなかつた、と評價する。しかし本稿で述べたように、七世紀いらい唐の雲南進出にたびたび抵抗してきたこと、成立後の南詔國において軍事面でも大きな役割を果たしていることから考えれば、楊氏をはじめとする有力氏族の實力も決して無視することはできないであらう。

雲南地方は氣候には比較的恵まれているものの、全體に高峻な山地がひろがり、農耕可能な平地はその間に散在するにすぎない。交通・交易に關しても點在するターミナル間でつぎつぎと擔い手が交替する中繼交易の形をとらざるをえない。⁽⁶⁵⁾このような地形條件からすれば、そこに成立する社會が分權的傾向に向かうのはごく自然な、いわば環境への適應であると思われる。現に南詔國成立前の雲南地方はまさにそのような狀況にあつたのである。南詔國が雲南地方全域を支配していた、とされることのほうがむしろ奇異な印象を與えるといつてもよい。

八世紀初頭頃までに大理盆地を中心として南詔國が成立するための條件がすでに整つていたことは事實である。しかし、唐と吐蕃という當時の二大勢力からさまざまな形で刺激を受けたことが八世紀中葉の急速な形成をもたらしただけでなく、も大きな要因であることは疑いないだろう。この二國の緩衝地帶としての役割を擔うことが期待され、それが支配階層に屬するものにとつてもっとも有利な道であつたからこそ、南詔國は雲南地方全體を代表する政權として登場する必要がある、だったのである。

實際のところ、八世紀末までに統治制度を整備し、周邊部の多數の民族を支配下においたとされる南詔國が、それだけ

の領域を面的に支配していたとは決して考えられないのである。漢文史料に南詔國の領域が非常に廣大に記されるのは單にこの地域にほかに特筆するほどの強大な勢力が存在しなかったということを示しているにすぎない。南詔國の實質的な支配地域はあくまでも大理盆地と昆明盆地を結ぶ雲南地方の中央部に限られていたといつてよい。その他の地域に關してはせいぜい重要な交通路上に城鎮を配して邊境防衛、あるいは交易活動の據點としての程度であらう。⁽⁶⁶⁾漢文史料に多くの民族が南詔國の支配下にあるとして列擧されているが、これは多くの史料のもとも基本的なよりどころとなった『蠻書』⁽⁶⁷⁾が、著者樊綽が南詔國の侵攻當時の安南都護府にあって敵軍に關する資料としてまとめたものであることを反映している。おそらく他民族支配に關しても、その多くは名目的に支配下にあり、戰時における動員が可能であるという以上の具體的なものではなかったと思われる。

それにもかかわらず、南詔國は雲南地方を代表する政權として一世紀半のあいだ存続し、しかも後期の各地への對外遠征に見られるようにかなりの實力を示した。これは雲南地方の物質的、そして人的資源が當時としては高い水準にあったことを示すものであるが、それと同時に、唐が南詔國の存在を必要とし、これにさまざまな面で優遇を與えていたことを忘れてはならない。

ある意味で、唐と吐蕃の勢力が拮抗する状態が續いたからこそ、南詔國の成立が可能になり、またそれが必要とされたと言ふこともできる。どちらか一方が壓倒的優位に立つような事態が長期にわたって生じたならば、必ず雲南地方を直接支配領域に組み入れようとしたことであらう。

貞元一〇年(七九四)に南詔國は吐蕃のもとを離れて再び唐に歸降し、異牟尋は唐から南詔王に封じられ、金印を授けられる。⁽⁶⁸⁾このとき劍南西川節度使韋皋が東蠻を通じて南詔國を招諭したのも、『通鑑』の收録する宰相李泌の言が示すように、ウイグルと南詔國を味方に引きいれて吐蕃をチベット高原に封じ込めようという作戰の一環だった。⁽⁶⁹⁾これ以降、太和三年(八二九)に南詔國が最初に四川に入寇するまでの三十數年間が南詔國と唐との蜜月であつた。

唐—吐蕃關係に基本的に依存するという體質は南詔國の全時期を通じて大きく變化しなかったと考えられる。それが後半期において具體的にどういう展開を示すか、またこの二勢力が瓦解した後に成立した大理國をどうとらえるべきであるか、などの問題については、稿を改めて扱いたい。

註

- (1) 『新唐書』南蠻傳・『通鑑』は「閼羅鳳」につくるが、本稿では『蠻書』・『舊唐書』南蠻傳の「閼羅鳳」に統一する。
- (2) 『西南中國民族史の研究』（大安、一九六九）。
- (3) 佐藤長『古代チベット史研究』（東洋史研究會、一九五八）各論第四。
- (4) 『舊唐書』卷一九六上 吐蕃傳上。
- (5) 「試論南詔統一洱海地區的歷史條件」（『思想戰線』一九八四年第三期）。
- (6) 『金石萃編』卷一六〇。
- (7) 『舊唐書』南蠻傳。
- (8) 同右。
- (9) 『通鑑』卷二二六 天寶十載四月・一一載六月・同十月・一二載五月・一三載六月。
- (10) 『德化碑』。
- (11) 『蠻書』卷三。
- (12) 『舊唐書』南蠻傳。
- (13) 藤澤前掲書、前編第六章第一節。
- (14) 藤澤前掲書、後編第一章第二節。
- (15) 『蠻書』卷九「清平官六人、每日與南詔參議境內大事。其中推量一人爲內算官、凡有文書、便代南詔判押處置、有副兩員同勾當」。
- (16) 同右「大軍將一十二人、與清平官同列。每日見南詔議事。出則領要害城鎮、稱節度。有事跡功勞殊尤者、得除授清平官」。
- (17) 『蠻書』卷六 雲南城條。
- (18) 『增訂南詔野史』（明・楊慎編輯、清・胡蔚訂正、乾隆四〇年石印本）卷上 大理國條。
- (19) 『蠻書』卷四 青蛉蠻條。
- (20) 同右 獨錦蠻條。
- (21) 藤澤前掲書、後編第一章第四節。
- (22) 白蠻種が漢人風の姓名を持つのに對し、烏蠻種は父子連名の風習を持つとされ、その用字にも「羅」「苴」が頻出するなどの特徴が見られるため、姓名からある程度の判別は可能である。
- (23) 「南詔・大理・民家の言語」（『民族學研究』一四卷二號、一九四九）・「南詔大理の遺民」（『東洋學報』三三卷四號・三三卷一號・二號、一九五〇）のち『牧野巽著作集』第四卷（御茶の水書房、一九八五）に收録。

- (24) 「南詔及び大理の民族とその遺民、民家の言語系統について」『民族學研究』一五卷三・四號、一九五二・「烏蠻白蠻の住地と白子國及び南詔六詔との關係」(同 一七卷二號、一九五三)・「南詔大理の住民と爨・樊・羅羅・民家族との關係」(同 一七卷三・四號、一九五三)のち『華南民族史研究』(六興出版、一九八五)に收録。
- (25) 『雲南白族起源和形成論文集』(雲南人民出版社、一九五七)。
- (26) 『新唐書』南蠻傳上。
- (27) 以下唐代の雲南地方の諸民族については『蠻書』卷四および『新唐書』南蠻傳下に列擧されている。
- (28) 牧野前掲論文。
- (29) 白鳥前掲論文。
- (30) 藤澤義美「南詔國の成立と吐蕃との關係」(『東洋史研究』二五卷二號)。
- (31) 『蠻書』卷四 施蠻・順蠻條、『新唐書』南蠻傳上。
- (32) 『德化碑』「乃命大軍將段忠國等與中使黎敬義・都督李宓、又赴安寧、再和諸蠻」。なお段忠國は後に清平官となっている。
- (33) 『蠻書』卷四。なお、この強制移民に際して同書では「烏蠻以言語不通、多散林谷、故得不徙。」と述べている。この「言語不通」は南詔國軍の主力が白蠻系民族によって構成されていたことの論據となりうるのではないだろうか。
- (34) 改變があったこと自體に關しては次に述べるような大軍將の人數の問題などによる。またその時期に關しては、『蠻書』の主な情報源を貞元十年(七九四)に異牟尋を南詔王に冊封するため雲南に赴いた袁滋の『雲南記』(『新唐書』卷五八 藝文志二)に仰ぐと想定されることによる。
- (35) ただし僉望は『蠻書』には見えない。『新唐書』南蠻傳上にも僉望に關しては明確な職掌が記されておらず、おそらくは各民族の族長レベルの人間に與えられた封爵のようなものであると考えられている(藤澤前掲書、後編第二章第一節)。
- (36) 『德化碑』(『贊普鍾』)十四年春、命長男鳳伽異於昆川置拓東城、居二詔佐鎮撫。
- (37) 李霖燦『南詔大理國新史料的研究』(中央研究院民族學研究所專刊之九、一九六七)。
- (38) 『蠻書』卷三「貞元年中、獻書於劍南節度使韋臯、自言本永昌沙壺之源也」。また南詔國後期になると一代王世隆の出生に關して龍の感生說話が述べられるなど、哀牢九隆傳說に附會する傾向がさらに顯著になる。
- (39) 『舊唐書』卷三 太宗紀下 貞觀二六年四月條、『新唐書』南蠻傳下 松外蠻條。
- (40) 『通鑑』卷二〇二 永隆元年(六八〇)七月條。
- (41) 藤澤前掲書、前編第五章第一節・第二節。
- (42) 「楊國忠德鮮于仲通、薦爲劍南節度使、仲通性褊急、失蠻夷心」。
- (43) 新・舊『唐書』の楊國忠傳にも同様の記載がある。
- (44) 『通鑑』卷二五 天寶五載五月乙亥條。
- (45) 藤澤前掲書、前編第六章第二節。
- (46) 以下、開元一七年までの記述にあたっては藤澤義美「唐朝

雲南經營史の研究」・「唐朝雲南經營史の研究（其二）」（『岩手大學學藝學部研究年報』一〇・一一卷、一九五六・一九五七）を参考にした。

(47) 『新唐書』南蠻傳下 松外蠻條、西洱河蠻條。『通鑑』卷

一九九 貞觀二二年夏四月丁巳條。

(48) 『唐會要』卷七三 姚州都督府條によれば麟德元年五月八日の設置。

(49) 例えば『通鑑』武德七年の章仁壽の遠征に関する記事がこの模様をよく傳えている。

(50) 『新唐書』南蠻傳下 松外蠻條。

(51) 『舊唐書』卷九一 張柬之傳。

(52) 『通鑑』卷二〇二 永隆元年七月條。

(53) 『通鑑』卷二〇八 景龍元年六月條。

(54) 佐藤長氏は唐九徵と李知古の征討行に關して、『新唐書』吐蕃傳上の記載順序に従って景龍元年頃に李知古―唐九徵の順に征討がおこなわれたとする。しかし唐九徵の遠征が景龍元年であることは『通鑑』・兩『唐書』中宗本紀から明らかであり、いっぽう李知古の遠征が睿宗代に行なわれたことは『通鑑』がこれに關する記事を景雲元年にかけ、『舊唐書』吐蕃傳上でも「睿宗即位」の後に掲げていること、および征討成功後の經營に反對した黃門侍郎徐堅が睿宗即位後に黃門侍郎となったことが新・舊『唐書』の徐堅傳に明記されていることから、ここでは『通鑑』の繫年にしたがって唐九徵の遠征を景龍元年、李知古のそれを景雲元年としておく。

(55) 『唐會要』卷七八 節度使條には開元五年の設置のごとく

書かれているが、いま『新唐書』卷六三 方鎮表および『通鑑』卷二二二の記載に従う。

(56) 『唐會要』卷七三には「毎年差兵募五百人鎮守」とあるのに對し、『通典』卷一七二 州郡二および『元和郡縣圖志』卷三二の雲南郡（軍）條では「鎮兵二千三百人」となっている。

(57) 佐藤前掲書、各論第四 第四節。

(58) 『德化碑』「李宓外形中正、佯假我郡兵、內蘊奸欺、妄陳我違背。賴節度郭虛已仁鑒、方表我無辜。李宓尋被貶流、崇道因而亡潰。郭虛已の劍南節度使着任は『舊唐書』卷九玄宗本紀下によれば天寶五載八月である。

(59) 藤澤義美「唐朝雲南經營の内容と目的」（『岩手大學學藝學部研究年報』一五、一九五九）第九・十項。

(60) 『通典』卷一七二 州郡二・『元和郡縣圖志』卷三一 劍南道上・『舊唐書』卷三八 地理志などに「劍南節度使、西抗吐蕃南撫蠻獠、統團結營及松・維・蓬・恭・雅・黎・姚・悉等八州兵馬、天寶・平戎・昆明・寧遠・澄川・南江等六軍鎮。」とあり、このうち黎・姚の二州、寧遠・昆明・澄川の三軍は現在の四川省南部と雲南省にあたる。

(61) 『蠻書』卷四に「及章仇兼瓊開步頭路、方於安寧築城、羣蠻騷動、陷殺築城使者。」とある步頭路開發當初の安寧築城に關して、『德化碑』には「遣越嶲郡督竹靈倩置府東爨、通路安南。賦重役繁、政苛人弊。」としている。安寧には鹽井があつて『蠻書』卷七には「升麻・通海已來、諸蠻蠻皆食安寧井鹽。」とされており、安寧築城に對する爨氏の反抗には

この鹽井をめぐる唐軍との衝突があったのではないかと考えられている（藤澤前掲書、前編第五章第三節）。

- (62) 藤澤前掲書、前編第五章第二節。

- (63) 『通鑑』卷一九九 永徽二年十一月條。

- (64) 『新唐書』南蠻傳下 白水蠻條。

- (65) 南詔國時代の雲南地方における交易活動の實態については

不明の點が多い。二〇世紀初頭―前半の中繼交易の状況に關

しつゝ H. R. Davies, 1909, *Yunnan, the Link between*

India and Yangtze (田畑久夫・金丸良子編譯『雲南 イ

ン』と揚子江流域の環』古今書院 一九八九)・C. P. Fitz-

gerald, 1940, "The Yunnan-Burma Road", *Geographical*

Journal XCV. などから知ることができる。

- (66) 周邊地域の特に重要な城鎮には節度・都督が置かれ、節度城には大軍將が赴任していたといわれる（『蠻書』卷六、『新唐書』南蠻傳上）。

- (67) 『蠻書』の成書およびその性格などについては、林謙一郎・武内剛編「『蠻書』索引」（『南方文化』第一五輯、一九八八）の解題を参照。

- (68) 『新唐書』南蠻傳上、『通鑑』卷二三三 貞元十年六月條。

- (69) 『通鑑』卷二三三 貞元三年七月および同書卷二三三 貞元三年九月の德宗に對する李泌の言。

Ming, merchants carrying abundant goods were nearly obliged to use this facility, and besides the storage fee and the brokerage, they had to pay commercial tax (each of them was 1/30 of commodity price).

Afterward, the privileged class including imperial relatives, meritorious ministers and eunuchs took notice the profitability of Guandian and Tafang. As they were given Guandian and Tafang as rewards and founded Kediantafang 客店場房 without permission, the privileged class gradually came to insist on the private ownership of them. The competition between their private Tafang and the public Guandian caused the decrease of commercial taxation. Through the separation of the warehousing business and brokerage from the complex Guandian and Tafang system, Guandian came to work mainly as commercial taxation office in the late Ming period.

THE RISE OF THE NANZHAO KINGDOM 南詔國

HAYASHI Kenichiro

Many studies of Nanzhao kingdom have focused on its tribal attribution. On the other hand, many other studies have stressed the importance of the growth of imperial Meng 蒙 family's power as a crucial element for the rise of the kingdom. This paper explains the birth of the Nanzhao kingdom from the view of the formation of the ruling class and its relations with the outer world.

Firstly, the kingdom was established by joint political partnership between Meng family and a local power. The powerful ruling class of the Dali 大理 basin, at the central area of the kingdom, played an important part in this partnership. The alliance between the Meng family and the local power was made possible mainly because of the increasingly tense relationship between Tang and Tufan 吐蕃 during the 8th century. Yunnan played the role of buffer zone between the two.

Secondly, Tang's rapid expansion into Yunnan, which brought about the resistance of the Nanzhao kingdom, had a great deal to do with the recapture of the fortress of Anrong 安戎城 as a strong counter-measure

against Tufan in western Sichuan. After the war with Tufan, the Jinnan military commissioner 劍南節度使 set about exploiting the Butoulu 步頭路, the route from the Kunming 昆明 basin to Jiaozhou 交州. However, unlike the previous century, the Tang government, because of the opposition of the indigenous minority groups, were not able to efficiently exercise the Jimizhouxian 羈縻州縣 system (a rather relaxed ruling system on commandaries and counties, usually appointing the local chiefs to head them). Powerful military control had to come into forth in occupying Yunnan. Such a policy was in conflict with the interest of the powerful families who were rising in the south of the Dali basin; they used the possible alliance with powerful Tufan as a decisive card in their negotiation with the Tang government.

**A BRIEF SURVEY OF THE BUREAUCRACY
DURING THE KORYŎ DYNASTY
—with the Ordinary Transfer System to
the Provincial Post in Focus—**

YAGI Takeshi

This essay examines the promotion system in the Koryŏ 高麗 bureaucracy. Through the analysis of the cemetery inscriptions 墓誌, which give us many materials about official careers, we can schematize the way they are promoted as follows.

First, they are qualified as the officials 官員 by virtue of the royal examination 科舉, hereditary status system 恩蔭 or the promotion from the clerks 胥吏. In each case, a court rank (tongjŏngchik 同正職) is conferred on them, but it has nothing to do with actual services.

The first position they gain is that of a vice-governor 倅 in the provinces. Serving out their terms, they are promoted to get a position as the officials 流內官 in Capital. And once again, after promoted to the seventh grade 七品 in court ranks, they are transferred to be a governor 守 in the provinces and serve out their terms. Only then are they raised